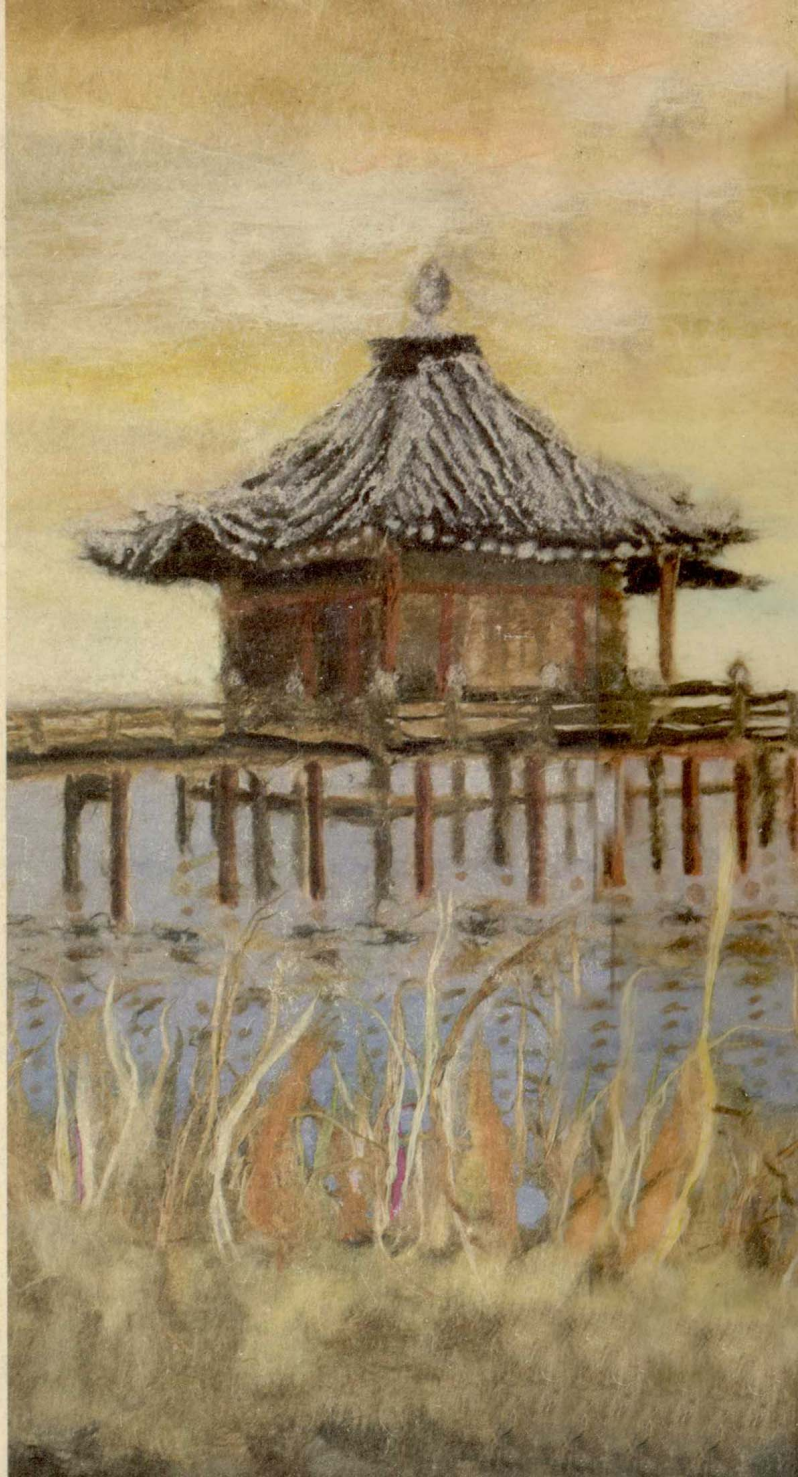


詩的紀行
日本の廃墟
伊藤信吉



詩的紀行日本の
廢墟

伊藤信吉

講談社

伊藤信吉(いとうしんきち)

一九〇六年群馬県前橋市生れ。
詩人。著書に平林たい子文学賞
受賞「ユートピア紀行」、読売
文学賞受賞「萩原朔太郎」のほ
か「詩をめぐる旅」、「紀行ふ
るさとの詩」、詩集「故郷」「上
州」多喜二・百合子賞受賞「天
下末年」などがある。

詩的紀行 日本の廃墟 定価九二〇円

著者 伊藤信吉

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二一二
〒一一二 振替東京八一三九三〇
電話 東京九四五一一二二(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

第一刷発行昭和五十二年七月二十五日



©伊藤信吉 昭和五十二年 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

詩的紀行

日本の
廃墟

目次

叢に埋れていたへ遠の朝廷	福岡	大宰府・水城	7
北海の幻の魚・ニシン漁の廃滅	北海道	積丹半島	19
竹久夢二のへ夢の廃墟	群馬	榛名山産業美術研究所	31
画家・山本鼎の農民美術運動	長野	上田・大屋	46
隅田川へ左岸の唄	東京	その詩的年代誌	61
赤レンガの残影帝国陸軍	東京	近衛師団司令部・連隊兵舎	81
掘割をめぐらした自由都市	大阪	堺・平野郷	92
夕浪千鳥の鳴く湖	滋賀	琵琶湖・余呉湖	108
ゴールドラッシュの地獄唄	佐渡	相川金山	123
廃滅した日本海岸石油地帯	秋田・新潟・山形		134

砂に消えた能登の塩田——石川 輪島・千枚田・珠洲	146
上野国府と平新皇将門——群馬 前橋	157
クリンタン殉教・傷痕の旅——長崎 島原・原の城	167
幕末のフランス・洋式城郭——長野 龍岡・北海道 函館	178
アプト式レール跡の旅——群馬・長野間碓氷峠・小諸	196
熱砂の砲弾試射場回顧——石川 内灘砂丘・河北潟	208
原爆遺跡をめぐって——広島・長崎・第五福龍丸	226
筑豊・空洞の上のボタ山——福岡 田川炭鉱	243
私の「ユートピア」紀行——北海道・岩手・宮崎	260
覚え書	271

写真 伊藤信吉

詩的紀行

日本の
廃墟

裝丁

坂本朱鷺

叢に埋もれていた△遠の朝廷▽——福岡・大宰府・水城

叢くさむらにひそひそと虫が鳴く。秋の深さを思わせる声である。草に埋もれた礎石に手をあてる。礎石の肌は冷たい。

筑紫の大宰府・都府楼跡（福岡県筑紫郡太宰府町）への私の旅はいつも秋であった。これまでに私は三度その土地へいったが、三度とも季節は秋だった。最初のときは九月だったので、夏草が一面に茂り、都府楼趾の礎石を半ばおおい隠していた。次は十一月中旬、その次は十月中旬だった。なぜ秋ばかりなのだろう。ここ数年にわたって、ほとんど欠ける年なく私は東北の旅をしているが、その旅はきまって五、六月ころである。東北の初夏と九州の秋。私の旅の磁石の針は、季節にしたがって北と南を指すかのようだ。

都府楼は大宰府正庁の楼閣だが、跡にのこっているのは三十六個の礎石である。それだけの遺蹟である。一つ一つの礎石は大きい。大きいけれども何の奇があるだろう。だが私ははじめてここを訪ねたときから、去りがたい魅惑に取り憑かれた。石を愛するということでもない。辺りの眺望に惹かれるというでもない。叢や虫の声に思いをそえられるというのでもない。古代憧憬の夢でもない。

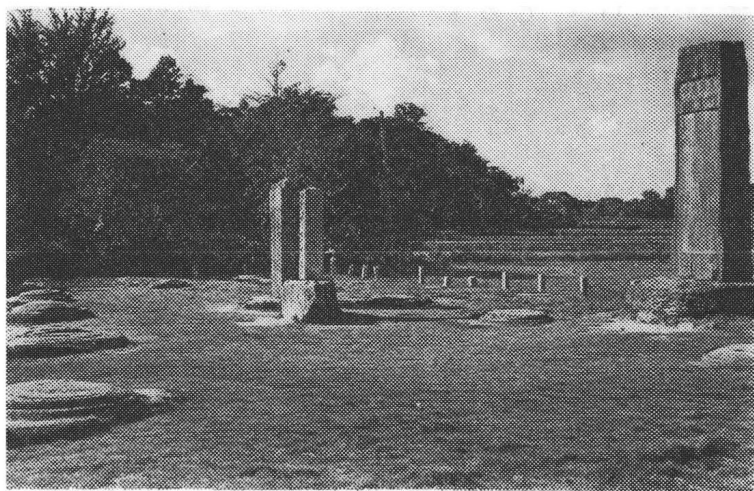
辺り一帯の眺望はむしろ平凡である。背面のあまり高くない大野山。その下にひろがる稲田。緩い

段丘。稲田つづきの都府楼趾。前面にも稲田があり、その向うに、大宰府跡、観世音寺、天満宮をつらねる道路が通じている。眼をひく格別のものはない。そして数年前までの都府楼趾は叢におおわれて荒涼としていた。私はその荒涼に魅惑された。

それは廃墟である。叢に古代の礎石の散らばる廃墟である。三度その土地を訪ねたのにもかかわらず、私が見たのは叢と礎石の荒涼ばかりだった。ひそひそと鳴く秋虫。叢をわたる微風。礎石の冷たい肌。そんなものだけを記憶しているのも、荒涼感そのものに惹きつけられているからである。

三度目の旅をしたとき——十月中旬のことだが、辺り一帯の景観がひどく変っていた。以前に礎石を埋めていたぼうぼうの叢は無く、手入れのゆきとどいた駱駝色の草が午後の陽に光っていた。そればかりではない。都府楼趾手前のひろい地域で、さかんに発掘がおこなわれていた。発掘された無数の石や柱の跡によって、古代の建築の姿を現わそうとしているのである。この発掘作業は、一九六八年（昭和四三）十二月に着手したことから、既にまる一年になるわけである。大宰府史跡公園の構想もあるという。一個の石、一本の柱の跡の穴。古い土の色。私は発掘作業の行なわれている数画の周辺をめぐるながら、そこにどんな都が生まれるかを思ってみた。千年の荒涼を経て、古代の都はどのように再構築されるだろう。

大宰府はすいぶん規模が大きかったらしい。ごく低い台地に建てられた都府楼はその北端に当たる正庁の楼閣で、背後に後庁を置き、左右手前に東庁、西庁があり、さらに中門、南大門、回廊、築垣などをつらねて「遠の朝廷」にふさわしい景観を成していた。発掘はその前面一帯で行なわれている。やがて発掘が完了したとき幻の都はどんな姿を見せるだろう。三十六個の礎石の上にどんな楼閣が組



大宰府正庁の都府樓跡

立てられるだろう。建物を復元するのだろうか。私は散らばった礎石をそのままにし、発掘した跡をそのままにして置くような、そういう荒廃の姿の方が好きだが、しかし実際にはそういう訳にはゆかないだろう。発掘したままではふたたび荒涼に戻る。荒涼と復元。埋没と発掘。荒涼感に惹かれる私は戸惑う……。

大宰府が設けられたのは国防の危機にそなえるためで、斉明天皇が朝鮮半島の新羅討伐の軍を進め、その日本軍が朝鮮の白村江で大敗し、朝鮮半島における勢力を失ったことから、国防のために設けられたのだという。唐・新羅連合軍に敗れたのは六六三年だった。

大宰府設置とともに北九州沿岸に防人が配置され、大宰府の近くに水城の大堤が築かれた。いわば国防都市として生まれたわけだが、やがてそれは外交の府、九州の都督府として発達した。藤原純友の「天慶の乱」(九四〇)で焼失した楼閣は、今度の発掘で、その後再建されたことが推定できたという。「遠の朝廷」として栄えその古い都が、千年の歴史を経てよみがえろ

うとしている……。

内政、外交の両面にわたって、大宰府の機能が完成したのは奈良時代に入ってからだという。役人の任用、収税などの内政から、帰化人の受け入れ、遣唐使の送迎、大陸・半島との外交など、すべての政治がこの都督府^{とくふ}によって管掌された。海外貿易による異国文化と物資の輸入。大宰府の盛時は壮麗な「遠の朝廷」を現出した。「遠の朝廷」という呼び方は、万葉の歌人が生み出した言葉である。そのように天平年代には、そこに万葉集の「筑紫歌壇」が形成されていた。

*

都府楼趾をたずねてまず眼につくのは、低い台地に建つ三基の石碑である。形が大きいので自然に眼につくが、これについて筑紫豊は『太宰府と万葉集』で「ここを訪れる人々、多くは、この三基の石碑に目を惹かれて、足下の叢にうずくまっている、五段剝出し、三十六個の、巨大な礎石群の配列については、等閑に附しがちである。が、石碑の一つは、寛政元年（一七八九）亀井道載の撰文を刻んだものであり、他の二つは明治四年（一八七二）と明治十三年（一八八〇）に、地元有志によって建てられたものである。大宰府跡を訪れて、まず、第一に見るべきものは、これらの三基の石碑ではなく、やはり、この頽然として、風化のあとも著しい礎石群であり、その雄偉な布置でなければならぬ」と述べている。

その通りである。そしてまた私は、この文章の「頽然」「風化」という言葉に眼をとめる。「頽然」「風化」は千年の荒廃に思いをとめた言葉である。太宰府の案内文ともいふべき文章に、荒廃を語る言葉の出てくることが私にはめずらしかった。荒廃・荒涼。そういう場所を過ぎるとき、身うちの何



都府楼遺構の発掘（1969）

かがさざめき、声もなく騒ぐ。私はそういう情緒の流動を追う。ほろびの手前のところで、生の寂寥に身ぶるいする。ほろびの恍惚感というべきものが身を揺する。「頽然」「風化」に眼をとめることは、ほろびの美学につながる意識である。

大宰府の盛時に万葉の筑紫歌壇を回顧するとき、にぎやかな歌の宴が浮かんでくる。筑紫歌壇の中心は山上憶良、大伴旅人、小野老、笠沙弥らだったが、天平二年（七三〇）正月十三日に、大宰帥大伴旅人の館で、梅花の宴が催された。万葉集巻五にその集がある。

梅の花今咲ける如散り過ぎず我が家の苑に

ありこせぬかも

小弐小野大夫

春されば先づ咲く宿の梅の花ひとり見つ

や春日暮らさむ

筑前守山上大夫

梅の花いま盛りなり思ふどち挿花に為てな

今さかりなり

筑後守葛井大夫

梅の花散らくは何処しかすがに此の城の山に雪は降りつつ

大貳大友氏百代

梅の花いま盛なり百鳥の声の恋しき春來るらし

少令史田氏肥人

春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊にあひ見つるかも

薬師高氏義通

梅の花手折り挿頭して遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり

陰陽師磯氏法麻呂

三十二首の梅の歌。後に加えた四首の梅の歌から、ここに八首を抜き出してみた。宴の折の作品なので、作品そのものとしては格別のことはない。それにしても、大宰府や国府にかかわる人々をはじめ、九州各地の人たち三十二人が集まり、それぞれに一首を詠じ、一日を惜しんだ情景は、現代詩の世界に住む私を驚かせる。京から遠い地で、これだけの歌会が催されたことは他に例がないだろう。歌が遊びであっても、その遊びはたのしく優雅だった。京から遠い地であるゆえに、梅の花の抒情はいっそう切ない。

大伴旅人が大宰帥として筑紫に下ったのは、神亀三年（七二六）か四年だった。着任して間もなく妻の大伴郎女が病歿した。悲運である。そこに山上憶良がいた。そのほかの歌人がいた。歌もまた悲運をなぐさめる一つの手段だったかもしれない。もちろん大伴旅人は詩人としての本質性を所有していたろうが、悲運の哀傷によって、

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

という注目すべき作品を誘い出されている。これは妻が亡くなったとき、京からの弔意に答えた作品だが、この一首には生の寂寥が歌いこまれている。これを斎藤茂吉は「思想的抒情詩」といったが、この思想的詩人と生活的詩人山上憶良との邂逅が、筑紫歌壇をいっそう生彩あるものにしたといつてよい。大伴旅人は大宰帥であり、山上憶良は筑前守という身分上、職制上の距たりはあったけれども、筑紫における二人のあいだには詩的交友といつていいような、内面的な触れ合いがあったらうと思う。

そのような詩的交友ばかりでなく、官職に在るものとして、そこには僻地筑紫から脱がれたいという共通の気持があったに違いない。いかに大宰府が「遠の朝廷」であっても、京から遠く離れた僻地であることに変わりはない。僻地の官職に在ることは憂悶でさえあったらう。

あをによし寧楽みやこの京師みやこは咲く花の薫にほふがごとく今さかりなり（巻三）

小野 老

吾が盛さかまた変おち若わかめやもほとほとに寧楽みやこの京みやこを見ずかなりなむ（巻三）

大伴旅人

沫雪あはゆきのほどもほどもに零り重おもければ平城みやこの京師みやこし念おもはゆるかも（巻八）

大伴旅人

これらの歌は京への郷愁である。花につけ、雪につけ、京への思いが胸を灼いた。私は歌人ではないし、古典和歌について知るところも少ない。その私が万葉歌人の作品をのぞき見るわけだが、大宰府跡をたずねたからには、在りし日の筑紫歌壇を見過みごすことはできない。礎石の傍らをさまよっていると、おのずから古代の歌が聴こえてくる。「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲し

かりけり」という悲傷の歌が、「頽然」「風化」の背後からきこえてくる。

都府楼趾から五〇〇メートルほど離れたところに観世音寺がある。この寺も天智天皇の建立にかか
るもので、沙弥満誓が養老七年（七三三）に、造観世音寺別当として赴任してきた。

「都府楼纔看瓦色、観音寺唯聴鐘声」という詩がある。この地へ流調りうきやうされた菅原道真の作品である。
流遇の人だった菅原道真は、朝夕の鐘声を聴いてわずかに慰めにした。菅原道真がこの地へ来たのは
延喜元年（九〇一）のことで、筑紫歌壇の盛時からずっと後である。菅原道真は学問の神として天満
宮にまつられている。天満宮一带は現代風俗に取りこまれている。

私は都府楼趾近辺の眺望に格別のことは無いといったが、しかし太宰府町一帯の地は、おのずから
何ごとかを話しかける。古代の言葉で話しかける。私は三度めの都府楼趾の旅とともに、もう一つの
廃墟というべき水城をたずねた。水城。奇妙な呼び名の塞である。

*

雑木が茂っている大きな長い丘。博多から鹿兒島に通じる国道三号線をゆくと、博多から一〇キロ
ほどのところにそういう丘が見える。国道三号線がその丘を断ち割って通じている。だが、それは自
然の丘ではなく、築きあげた長大な堤である。水城の跡である。堤の両面は田畑である。道端に案内
の高札が立ててある。

「水城の建設は天智天皇の御代（六六四）に朝鮮の白村江の戦で大敗した我が国が新羅の侵攻をおそ
れて大宰府防衛の第一線として大堤を築き水を貯えたものであり、その為『水城』といわれ、堤の外
面は急斜、内面は三段構となり、堤高約十四メートル幅約三十七メートル余、長さ約千メートル余に